

## 紹鷗時代の茶法

筒井 紘一（茶道資料館副館長）

講演日・平成二十一年十一月二十九日

私どもの資料館は小さく、あるテーマで展覧会を開催してもご覧になっていたくのは、七、八十点もない程度になるので、一つのテーマを何度かに分けて開催しながら追求していくという方法をとっている。昨年は鎌倉時代の喫茶文化で、今年はその後の珠光、紹鷗、利休という、わび茶の発生から大成に至るまでの過程を展覧会で表現したいと考えた。

珠光が八十歳で亡くなったのは一五〇二年だから、五十代から草庵茶の萌芽が始まったと考えると一四七〇年代から八〇年代になるので、応仁の乱以後義政が隠居をした頃を最初として、利休が長次郎に黒茶碗を作らせた天正十四年（一五八六）の頃を最後とする展覧会である。草庵茶が興った珠光の時代の資料は大変少なく、今回は奈良の宝山寺所蔵の『禪風雜談』が重要な記録である。これは自筆本ではないが、金春禪竹の孫にあたる金春禪鳳の書に珠光の名が出てくる資料

の一つであるが、展観はそのくらしいの時期から始まる。そして、紹鷗の死去が一五五五年であり、利休も三十四歳になつていたので、その時代を中心しながら今日はお話をさせていただけようと思う。

濃茶と薄茶とが分かれた時期は、紹鷗の時代である。その認識を新たにしないといけない。と同時に、今日お出での方々はお稽古の際に、「お菓のお形は」と尋ねると、「利休形中菓」などという。しかし、それ以前には少なくとも茶入が数多くあるはずなのに、棗を使用し始めたのはいつ頃からか疑問に思われたか。或いは、楽茶碗の展観がしてあるけれども、それ以前には、朝鮮半島や天目のような中国の物もあるし、そうするとこれはどういう使われ方をしていたのか疑問に思われたのだろうか。そこまで考えて武野紹鷗の時代に濃茶と薄茶というものは、はっきりと分かれているというところをご認識いただきたい。

何故ならば、そこに茶道具の遠近感も関係してくるからである。今回展覧会の中で一つだけ「松花」という茶壺が展観されている。この「松花」という茶壺は徳川美術館から拝借している。徳川さんには、「金花」という茶壺とこの「松花」という茶壺がある。つい最近、「千種」という「山上宗二記」の中にも出てくる茶壺が、アメリカのクリスティーズのオークションで、ワシントンのフリーア美術館に六千五百万円で落札されたことが新聞に出ていた。現在のアメリカで評価された茶壺であるが、明治以後茶壺の存在は茶道から遠い道具になっていた。茶道具には道具の遠近がありそれが変化してきたからである。

今日庵文庫で発行した『茶道文化研究』の第一輯に『烏鼠集四巻書』という書物が復刻掲載されている。数冊の書物の一つにまとめて四冊本にしたのだが、その中の一つが元龜三年（一五七二）と書かれており、一五七〇年前後、利休の五十歳前後に幾つかの本がまとめられているといえるのではないか。明確に言えるのは、その中に『茶具備討集』というものがありそれは天文二十三年（一五五四）に編集されている。名物集について研究されている矢野環氏が『茶具備討集』は天文二十三年

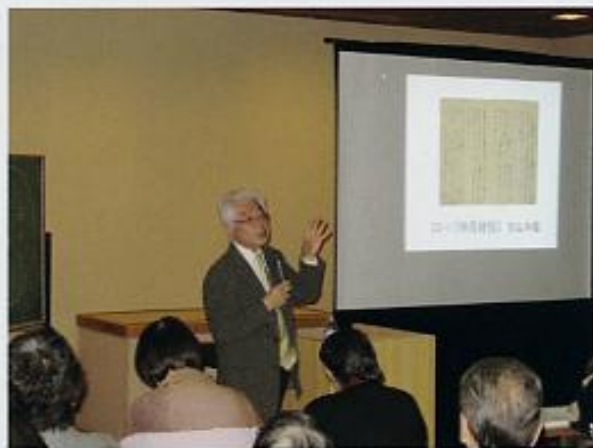
に書かれたといっているのだからとされているから（『茶道学大系第十巻 茶の古典』（淡文社）である。そういう時期の本だが、その『烏鼠集四巻書』の中に、道具の遠近ということが書かれている。

現在の茶道界で茶に近い道具とは茶杓や茶入など、これは銘をつけるものである。大事な物には名前をつけるということ、古代から大事な物には名前をつけている。そうであるならば、この時期、すなわち一五五〇年前後の時期は茶杓などは茶に遠い道具の一つで、銘がついている茶杓はない。そうすると、この時期最もお茶に近く、現在最も茶に遠くなっている道具は何かというと、それが茶壺である。大茶壺と「四十石」という有名な茶壺があるが、これは千本道提という千本に住んでいたから千本道提というのであろうか——これが義政に仕えた後、四十石の米がとれる所領を頂いたが、あるとき店先にあった茶壺がどうしても欲しくて四十石取りの土地とその茶壺を替えたといわれている。だから「四十石」という銘がついた。古くにもう銘がついている。他にも「松島」や「三日月」など、

早くから銘がついている。

それから考えると、茶人はどうか。茶人で一番早く銘がついたのは、どのような茶人だろうか。例えば珠光が所持したといわれる珠光小茄子、珠光文琳、今回陳列されている武野紹鷗の紹鷗茄子、紹鷗の師匠である十四屋宗悟という人が持っていた茶入が宗悟茄子など、全て所持者の名前であって銘ではない。

それに、利休所持の茶入、何があるかという点、利休物相、利休丸壺、利休円座、利休尻臍、利休鶴首、五つ程あるが、全て利休が持っていたというだけの茶入であって、銘ではない。これをよしとするかどうかは別にして、唯一利休が持っていて銘がついた茶入という点、「布袋」という茶入がある。これは、また逆に唐物ではない。それは、天正十五年



(二五八七) に利休が秀吉と共に九州の島津征伐に行った際に入手した

備前焼で、博多の神屋宗湛という大豪商にして『宗湛日記』という茶会記を書いている神屋宗湛に渡して、これに仕覆をつけてくれ、と言った。それでつけてきたのが、古い古金欄、白地の古金欄をつけてきた。金欄を被せるというのは、本来唐物でないといふ被せないが、中身は何かわからない、布袋が持っている白い袋の中に入っているかわからないので、利休が「布袋」という銘をつけたという。これは、天正十五年の『宗湛日記』の中に出てくるから、「布袋」という銘を利休がつけたというのは確かであろう。ということ、どういふことかという点、茶入に銘がつき出すのは、主としてそれ以後のことだということであろう。

最も早い茶入の銘は、「つくも(九十九) 茄子」ではないかと思う。これは珠光が九十九貫で求めたのでそのような銘がついたと伝えられているが、もうそのような時期に「九十九」と書いてある。「つくも」は幾つか書き方があり、「付藻・作物」と書いたりもするが、これが一番早いのではないか。「初花」や今回展示されている「遅桜」などは、銘としては後のほうである。だから、茶入というのは、『君台観左右帳記』(資料1)の最後に、抹茶壺の図が出てくる。しかし、必要なものとい

① 利休の茶壺  
② 利休の茶壺  
③ 利休の茶壺  
④ 利休の茶壺  
⑤ 利休の茶壺  
⑥ 利休の茶壺  
⑦ 利休の茶壺  
⑧ 利休の茶壺  
⑨ 利休の茶壺  
⑩ 利休の茶壺



資料1 『君台観左右帳記』(『茶道古典全集』第二巻(淡交社)より転載)

いながら、銘はつかない。

一方、『山上宗二記』の記述のはじめの部分は何かというと、宗二記の特色の一つであるがこれは名物道具帳といってもよいものである。最初は、茶壺で、茶壺が三十も四十も書かれており、後のほうになって、茶入も出てくるし、茶碗や水指も出てくる。ということから考えると、茶壺がいかに大事かということがわかるが、それは茶壺がなければお茶ができないからである。茶壺というものは、耳が四つついていて中に白い袋、白袋が入る。白袋という袋は、通常は一袋をへいったいというが、一袋には二十匁入った。濃茶は一人一匁、即ち三・七五グラムであるこ

とは、古い茶会記を見るとわかる。客の人数は通常は三人以下で、三人以上の茶会記は、永禄年間ぐらいになつてからしか出てこない。松永正の茶会が一番多いくらいで、五人呼んでいる。これは、次第にお茶をする人が増えてきて、客の人数も増えてきたということになるわけだが、通常は一人、二人、三人。しかし客は三人くらいでも、一度茶壺から抜き取った袋は素人では戻せないで、二十匁入った袋ということ、二十人前を挽かなければいけない。茶壺の中の白袋が濃茶になり、この周りに薄茶が入るのだが、その薄茶というのが薄茶になる。数年前に資料館の夏の展覧会で茶臼を挽いてそのお茶を飲むという体験をしてみようことにした。ほとんどの人は茶臼という点で右回りで挽くが、茶臼は必ず左回りでなければならぬ。右回りで出でてこない。回す速さは一分間に大体五十五回、そして一時間出てくる量が四十グラムとなる。つまり、一時間挽いても大体十匁しか出てこない。もう少し早く回すともっと出てくるのだが、そうすると白が熱を持ち、香りが飛んでしまう。現在は、五十五回くらいに設定して温度を十八、九度に抑えた部屋で一年中引いているのでいいが、昔はそうはいかない。薄茶というのは、白袋を保護するもので、それが薄茶になるわけだから、濃茶と薄茶の差と

いうのは今よりももっともつと大きかったと考えられる。そうすると、二十匁では量が多過ぎる。十匁あれば十人が飲めるのだからそれで十分である。今は口切でも、大茶壺に入れることはないから、宇治の茶師は必ず十匁を入れて半袋とし、二十匁の一袋というのほとんどない。そうすると、半袋であるから、十五センチくらいの袋に入ってくる。さらに最近では四半袋といって、五匁しか入っていない七センチくらいの袋に入れている。

紹興の時代の茶法が書かれた『烏鼠集四巻書』という本の中にお茶の銘がある。「烏鼠集百首」といい、この中に「極無上別儀無上や揃碎 簾屑の他にあるは国茶か」という歌が出てくる。すなわち極茶、無上茶、それから別儀無上茶、これが濃茶である。そしてソソリ、クダケ、ヒクゾの三つが薄茶なのである。このように明確に分かれている。ペコという茶の葉の一番良いところが「無上」で、その中から別に選り分けて、さらに良い部分を抜き出したものが「別儀」と名付けられたものである。こういう銘がつくとともに、これらの茶銘をきちんと書いておられるのが、『天王寺屋会記』である。『天王寺屋会記』は自筆本が残っている。自会記と他会記と両方の茶会記の自筆本が残っていて、最初が天文十七年（一五四八）からである。御存じ

のとおり、『松屋会記』は天文二年（一五三三）から書き始められているが、現存しているのは江戸時代になってからの写本であるから、『天王寺屋会記』のほうが確実に第一等資料といえることができる。この自会記の天文十七年十二月六日の最初の会に「御茶 別儀」、「薄茶別儀ソソリ」と出てくる。他にも薄茶で「無上」「別ソソリ」ともある。

それは、結局こういうことである。茶会には濃茶用である「無上茶」を使用した、その中からさらに良いお茶を選別して「別儀」として濃茶に使い、薄茶に「無上」のお茶を使つたのである。上質の茶をつかって濃茶と薄茶を差し上げた、というふうに読める。それは、天文年間にはつきりと濃茶と薄茶に分かれていたという資料なのである。茶が分かれていたということは、即ちお点前も道具も色々なものが分かれていたということも理解しておいていただきたい。わび茶の大成は利休であったろうが、何から何まで利休が成したのではなく、多くの試行錯誤の時代を経て利休がまとめたのであって、それ以前に随分茶法が整い始めていたということである。

次に道具のことである。濃茶・薄茶と分かれていくのであるから、道具についても区別されていたと考えなければならぬ。先ず天目を中心に見ていきたい。代表的なもので

うならば、今陳列してある油滴だが、通常「油滴天目茶碗」などという言い方をする。「曜變天目茶碗」もそうであるが、「油滴天目茶碗」とした場合、大抵の人は一つの茶碗の名称で「油滴天目茶碗」と考える。しかし、茶道成立期にあつては、「油滴天目茶碗」と出てきたら「油滴」と「天目」と「茶碗」は別物と考えなければならぬのである。三つ出ていると思わなければならない。例えば宗達などの最初の時期、先程の、一五四七、八年ごろの茶会記の中で、「天目 茶碗」とこう出てきた時に、茶碗は一つなのか二つなのか私は区別は非常に難しいと思う。別々の可能性が強い。油滴や曜變は「蓋」といい、「天目」や「茶碗」とは別物なのである。

茶人の「小壺」と「茶人」も別物で、盆立てにするものが基本的には小壺である。盆立てにするものというとう、茄子・文琳・丸壺でこれを小壺という。尻膨と肩衝は茶人といい、大海などは入らない。それゆえ茄子、文琳、丸壺というのは非常に位が高いのである。ところが、その茄子、文琳、丸壺を使っている時期は茶杓が違っている。今のような竹の茶杓は入らない。象牙の杓で上下ともに非常に細い朱徳形という杓を用いた。例えば、松永弾正がお茶会をしたとき、一人分に六杓入れている。私はある研究者と論争したことがある。六杓

入れるのでその方はその時期即ち永禄六年（一五六三）頃に飲み回したという。私は飲み回しという吸茶はもつと後になってからだと考ええる。いつ頃から始まったかというところ、吸茶は明らかに天正十四年以後で、天正十四年以前には、絶対出てこない。もう一つ前をいうならば、先程は

「茶」と書いたが、それは「濃茶」と「薄茶」という名前ではない。「茶」は「茶」なのであり、薄茶はその茶より薄くするから薄茶なのである。この「茶」というものを当時「真の茶」と言い始めた。そして、濃茶と薄茶とはつきり分かれて書かれるようになるのは、少なくとも私が調べたところでは、天正十四年である。それ以前には、出てこない。もし出てきても数年違いであろう。このときに「濃茶」という言い方が始まった。小壺ほどの大きさならば、三人の客にお茶を出した場合は十分足りるが、五人、六人になった時は茶が足りない。こちらのほうは小壺でお茶を出したら、次の三人はどうすればいいのか。一回小壺を引いて、水屋に入れてくるか。でなければ、棚の上、箆笥（たじ）棚とか道庫棚というが、その棚の上に置いてある頭切とか、頭切という「金輪寺」、あれが頭切の形であるが、そういうものとか薬器等を置いて使用する。そうすると丸壺の三人と頭切の三人と、同じお茶かどうかは亭主しか知らな

い。前の三人と後の三人が同じお茶なのかと疑いはじめたら、一座建立は成り立たないのではないか。一味同心というのが崩れてしまう。そうすると疑心暗鬼が出てくるのでよくない。そこで大きな茶入、すなわち背高肩衝とか大肩などの、大きな器と一緒に飲んでいけるものを使用すると満足できるわけである。だから次第に、茄子、文琳、丸壺の小壺というの、価値が下がって、肩衝や尻膨、大海のような茶入が大事にされていくようになってくる。

茶碗については、まず、天目から見よう。「禪鳳雑談」に、珠光の物語として、この一行目に「月も雲間のなきは嫌にて候」とこう書いてある。「これ面白く候」、「池坊の花の」と書いてある。この「珠光の物語」と月も雲間なきは嫌にて候」という、これが草庵茶の美意識である。その本になっているのは、これはもうおわかりのとおり、「徒然草」の中に出てくる「花は盛り、月はくまなきをのみ見るものかは」ということである。日本人の美意識の話をしないとわかりにくいのだが、大転換する時期がある。大転換する時期というのは、いつかというとき、末法思想が広まってからである。末法思想というのは、入末法という時代が一〇五二年に来るが、この末法思想以前には日本人も満月を好んでいた時期がある。このように

「月も雲間のなきは嫌にて候」ではない。「花は盛り、月はくまなきをのみ見るものかは」ではなく、「願わくば花のもとにて春死なん、そのきさらぎの望月のころ」と歌ったのは、芭蕉が最も尊敬した西行である。西行でさえも、満月の見事な花の下で死にたい、とこう言っている。藤原道長は「欠けたることもなしと思えば」と言った。即ち満月を見ることが美だったのである。

それに対して末法、いわゆる無常観というのが起こってきた段階で生まれてくるのが、期待美であり、想像美である。不完全美というべきか。西尾実氏に言わせると、この三つをいう。中世の美意識は期待美で、直接見てはつまらない、想像するところ、すなわち蕾を見て盛りだったらどれほど美しいだろうかということである。兼好が言っているが、祭りを見るのに人を押しのけて前に出るなどというのである。そして牛車の音を聞いて、ああ今どれほど華やかかと思っただけで、これが本当に祭りを見ることだということである。でなければ、祭りが終わった後の朱雀大路に立ってみなさい、華やかでどのように通っていったのか、そのように想像しなさいと、こう言っている。それを西尾実という国文学の大先生が、想像美であり、期待美であり、それから不完全美と、言ったのである。不完全美を使った代表が、近代

で言うなら岡倉天心で「茶の本」の中の一審冒頭に出てくる。

次に、今展覧している重文の油滴天目であるが、天目がなくてもいいので油滴なのである。これが建蓋、林原美術館の建蓋(資料2)で別名



資料2 建蓋 (財) 林原美術館蔵 『わび茶の誕生—珠光から利休まで—』(茶道資料館)より転載

兎毫蓋とも言う。後に天目も茶碗もみな一緒になったとき、禾天目という。これは、灰被天目、灰被で銘は「夕陽」である。この「夕陽」は、図録をお持ちの方は私の書いたところの八十九ページにある、松屋久政が初めて東大寺の四聖坊のところへ出かけた際の茶会記に出てくる。会記では「たじ」と書いているが、軍筒棚という棚、今の旅軍筒のようなものを使用している。この四聖坊というのは、大茶人だったが、続いて、二回目が天文五年(一五三六)に呼ばれて行き、そのときに四聖坊が使った茶碗、これが「天目」で銘「夕陽」と出ている。「夕陽」のこの茶碗(資

料3)で松屋久政がお茶を飲んでいたのである。四聖坊がこれを持って



資料3 灰被天目銘夕陽 『わび茶の誕生—珠光から利休まで—』(茶道資料館)より転載

いたということは、珠光もこれで飲んだ可能性があると感激した。茶道具で五百年こうやって残ってきたというのはすごいと思う。展示してある「玉興」という水指も、やはり四聖坊が松屋久政を呼んだ時に使用している。そうすると、伝来というのはすごいことだと本当に感動する。

それから、これが黄天目。さて、今見てきた油滴、建蓋、灰被と黄天目だが、それを「君台観」はご存知で見たい。「君台観」はご存知の通り前半は唐物の絵について、百七十二、三名の名前が羅列してあり、その後他の道具についても上の上の上々から上の上の上…下の下まで評価が書かれている。その後の部分に茶碗のことが出てくる。みてわかるが、「茶坑(茶碗)」という

青磁か白磁であった。だから、「天目茶碗」とあると、「天目」と「茶碗」と二つあったことになる。そして、「土之物」を見るときに、曜變、油滴、それから建盞と続くが、この三つを「建盞」と言う。すなわち建盞というところの福建省の窯で焼かれた茶碗のことを建盞と言ったのである。その中の最高の物がここに出てくる曜變で、建盞の中の無上、一番良いものである。他にはないもので、これは萬正のものだと書いてある。油滴は、第二の重寶と書いてある。これは五千正と書いてある。それに次いで大事にしたのが、建盞。これは、油滴には劣らないけれども三千正だと書いてある。続いて、烏蓋や曜蓋や玳皮蓋が出てきて、千正と書いてある。これもしかしながら、「盞」なのであり、次に「天目」と出てくる。「天目、つねのことし。はいかつき（灰被）を上」だから、灰被が天目なのである。黄天目というのは出てこないが、灰被と同種である。ただ、「上には御用なき物」と書いてある。即ち第一級品ではなく、「代に及ばぬ」値段がつかない、いらぬという。義政にとつては、天目などは使わない、とこういつているのである。

ということ、どうということかと言おうと、以前に当館で「天目」という展示会をしたが、天目というのは、中国でお茶の飲み方が変化してきた

から、茶碗が変わってきた。茶碗が変わってきたからお茶の飲み方が変わったのではない、そこを間違わないで欲しい。唐の時代のお茶は、釜の中のお湯に、ひいたお茶を投げ入れてそしてかき混ぜて飲む団茶で、宋代のお茶は抹茶というが、その分け方は全く違っている。団茶というのは、運びやすいように団子にして、飲む時には粉にして、その粉にしたものを釜に入れるのが、唐代の陸羽の飲み方だが、宋代のお茶は基本的に団子にしない。葉っぱのままを粉にして、そして今度は盞の中に入れて点で飲む飲み方だから、お茶の色が違ふ。唐の時代のお茶はどちらからという、黄色っぽい白っぽいからという、黄色っぽい白っぽいから、それ故唐代には、白磁や青磁がお茶に合う。それに対して、宋代になると、お茶の色が青くなる。青くなるから、黒っぽいお茶碗が合うのである。利休が長次郎に黒い茶碗をつくらせたのは、あれは最初から黒を意識したと勿論思うが、利休の時代には非常に蒸し方が上手になって、本当に緑色のお茶ができるようになった。だからこそ、あの中に入れては美味しくも何ともない。

その次の時代、元の時代には、お茶はあまり飲まなくなった。お茶が基本的に採れないから、飲む習慣が

なかった。その後、福建省という茶の産地を抱える明が建国されたが、明のお茶の飲み方はまた違う。だから、外側がどんな色でも中は白になる。現在の湯飲み茶碗の内側は白っぽい、それは白い茶碗が似合うからで、茶碗の色が変わったのはお茶が変わるからなのである。

その盞や天目は、最初につくり始められるのは、五代の時代といわれるから、九五〇年頃である。九〇七年に唐が滅んだ後、五代があつて、そのころから外に広がった形の茶碗が作られる。同じ天目でも、時代とともに形に変遷が見られ、現存の所謂天目の茶碗というのが、南宋の時代の筆頭のお茶碗ではないか。これが、一一〇〇年代で、その後中国でこういう茶碗が焼き終わるのが元の時代であるので、十三世紀後半にはほとんどなくなっていた。ところが、日本人が唐物志向の中で沢山欲しがり始めたのはいつか、義政が隠居した時代としたら一四七〇年頃になる。そうすると二百年も前に焼成が終了していた天目類だから、日常の飲茶用茶碗としては、ほとんど残っていない。商人たちは褐色釉ならばどんなものでもいいから、黒っぽい茶碗を沢山輸出してきた。その数多く渡って来た中で、義政が取り上げたのが建盞で、下手な灰被は使用しなかった。それを取り上げたのが草庵茶で

あり、この灰被、黄天目を好むようになってきた。

茶碗とは、珠光が取り上げた珠光青磁茶碗（資料4）のことである。



資料4 珠光青磁茶碗

これら、灰被や茶碗を取り上げたのが珠光であったため珠光青磁といわれるようになるのだが、珠光が生きた時代にこうした名称でよばれることはなかったにちがいない。これを継承して珠光という名前を世間に大きく広めたのは、後継の、小者（召使）だった宗珠という人である。

少し話を点前のほうに進めたい。これは、「おようのあまの繪巻」（資料5）だが、仏壇が飾られ三具足が置かれている。反対側の押し入れの戸は開き、軍筒（たじ）といわれる軍筒棚か道庫棚がある。そこに釜と、桶水指と、根来盆の上に天目と茶入様のものが置かれている。茶匠の家ができて初めて茶室が別につくられるようになってくるが、本来的には

